山梨新報「直言」原稿

「天才の発見」

山梨県立大学長　伊藤　洋

二〇〇九年十二月二五日

先月２６日、ハンガリー・ソルノク市立交響楽団演奏会が開かれ、辻井伸行の弾くラフマニノフのピアノ協奏曲第２番ハ短調を山梨県民文化ホールで聴いた。目をつむって辻井の演奏を聴いていると、視覚から入る夾雑物が全て払い除けられて、粒だった音が湧き出してくるような不思議な感覚にとらわれた。さすがにバン・クライバーンをして「奇跡としか言いようがない。神業だ！」と言わせただけの聞きごたえだった。

辻井伸行（２１）は、今年６月７日、バン・クライバーン国際ピアノコンクールにおいて、日本人初の優勝者となった。このピアノコンクールは、過去にラドー・ルプーやアレクサンダー・コブリンなど、多くのマエストロを輩出した名誉あるコンクールである。

その辻井のインタビュー記事が文部科学省の機関紙「文部科学時報」１０月号に掲載されていた。大変興味深い内容なので、同誌から少しだけ抜粋させて頂く。

辻井は４歳から、いわば「英才教育」としてピアノのレッスンを始めている。これについて「４歳から本格的に始めたといっても、バイエルです、練習曲は一切やらずに、自分の好きな曲を、楽しく弾きながら勉強していくという感じでやっていました。本当にピアノが好きで好きでしょうがなかった、という感じでしたので、伸び伸びと、いってたのかな、と思いますね」。学ぶという行為について、「好きで好きでしょうがない」という喜びを、学生・生徒・児童・幼児に与えてきたのか否か、いま教育にたずさわる全ての人々が検討し直さなければならない重要な課題である。

辻井の才能を発見したのは、彼の母親であった。辻井が１歳の頃、スタニスラフ・ブーニンの弾くショパンの「英雄ポロネーズ」のＣＤを母親がよくかけてくれた。というのは、これを聴かせていると、赤ん坊はいつも足をバタバタさせて上機嫌だったので手がかからなかったからお母さんはこ

のピアノ曲を聞かせて、ピアノとこのCDいたのかけてい切れて再生ばかりこのCDとうと擦りて、まう。

そこで、両親はまた新たに同名のCDを買ってきたころが、今度は全く反応しなかった。赤ん坊に聞かせた。

たしかに、お母さんは、新たにCDが人買って来たCDはなく別人のものだったこのブーニン盤ではなかったこと気がついた。これが辻井の才能を両親が発見した瞬間だった。

「それで、母は、この子には、演奏家を聞き分ける力があるのではないか、と思い、私におもちゃのピアノを買ってくれました。（中略）ちょうどれ2歳3か月くらいのクリスマスの頃、ある日、母がジングルベルを歌ってい、隣の部屋からいたところ、それに合せて弾く音が聞こえてきたとのことなのです。（中略）それを見た母は、この子には才能があるのでは、と思ったようです。それがきっかけで、4歳からピアノを習い始めることになりました。」と回顧している。

これは、一人の人間の「才能の発見」のドラマである。一個人の才能発見は、教育にとって1丁目1番地。全てはここから始まる。しかも、これが早期であれば、本人ではなく他者によってしかなく「発見」される機会は無い。まして、辻井は全盲である。自身が自分の才能を見つけるのは実に難しい立場にあったのである。

大量のフリーターやニートを出現させてしまったこの国のこの時代、辻井と母のこの話は、私たち日本の大人が若者の才能の発見につい、真剣に努力してこなかったことを鋭く糾弾していると聞こえる。まるで教育の名を借りて「バイエルや退屈な練習曲」ばかり弾かせるような愚を、教育関係者はしてこなかったか。

辻井はまた、「目が見えないからといって、苦労したことはありません。ただ、どうしてもできないことなどはありません」が、そういったことは、関係なく、僕にとってはやはり、ピアノがあるから、ピアノが弾けるから別に関係ないことである、と思っています。（中略）見えないからこそ、僕にとっては、ピアノがあり、今、この人生があるのだな、と思います。」

今日はクリスマス。ジングルベルの音が至る所から聞こえてくる。おもちゃのピアノでこれを弾くかすかな音が聞こえてくるのかもしれない。

「達観」から出てくるこんだ粒立った音色は、あの澄まして聴いてみよう。こないか、心と耳を澄ま